

平成二十八年 度 金沢学院短期大学 入学試験問題（一般入試Ⅱ期）

国 語

（注意事項）

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は本文十ページであり、解答用紙は一枚である。
- 3 解答はすべて解答用紙の指定のあるところに記入すること。
- 4 問題冊子は、持ち帰ってもよい。

問題は、次のページからです。

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

何はともあれ、床だけは平で清潔でなければならない。こう考えるのは実は日本人だけで、欧米ではモザイク・タイルや煉瓦敷きのようになわごとでこぼこした床でも平気だし、手で触れないくらいのも汚れも平気。中国の食堂にゆくと、床に食事のカスをどンドン落とす。

日本人が床に敏感になったのは、もちろん履物を脱いで裸足で家に上り、座ったり寝そべったりするからだ。床に皮フが直に触り、なめらかさや硬さや温度はもちろん湿度まで、床材の持つ性格や状況のすべてを感じ取ってしまう。

もしこれが、外で靴を履いていたなら、靴を脱いで家に上り床に触れてもそう敏感にはならなかったろうが、なんせ日本人はあまりに長らく素足で暮らした。現在、東京の西郊の国分寺に住んでいるが、トナリの農家の小柳さんに聞いたら、戦前はむろん戦後も十数年は、農家の子は素足で小学校に通っており、国分寺小学校のシヨウコウグチには足洗い場が付いていたそうだ。

履物を履く場合も、昔はワラジで、これは履いてみれば分かるが、実は素足といい勝負。ワラは地べたの凹凸をやわらげるには柔らかすぎると、水気はすぐに浸み通ってくる。そして何よりも実際に履いてみて驚くのは、ゾウリとちがい鼻緒より先がないことで、五本の指は直に地面をとらえる。

その結果、足は手と同様に五本の指が扇状に開き、同程度に鋭敏な触覚を持つにいたる。子供の頃、かいぼし（排水して魚介を採ること）をした時、水の引いた泥沼に腰までつかって足先でまさぐり¹、わずかな触覚だけで貝と石ころ、フナとコイ、ウナギとナマズを識別できた。もし調べる方法があるなら、欧米人より日本人の方が足の認識力は高いことが証明できるだろうし、日本人の中でも相撲取りが一番にちがいない。なんせ、素足のスリ足なのだ。

スリ足といえど能や盆踊りもそう。脚を高くあげて早く走るヨーロッパ式の歩行のエイキョウを受ける前の日本人は、スリ足でゆっくりが基本になっており、この歩行の伝統が力業では相撲、表現では能に結実している、と聞いたことがあるが、湿ったり乾いたり、温かかったり寒かったりの変化のいちじるしい列島の地べたを素足のスリ足で歩き続けて何千年の日本人の足の裏の感覚が世界一敏感になるのは当然の結果なのだ。

A、そうした肉体的な条件だけで日本人の床へのセンスが磨き上げられたわけではない。似た条件はトナリの朝鮮半島にも見られるが、かくべつ床へのセンスが発達した気配はない。日本列島の人々は、どっかで、床を格別なもの、大げさにいうと聖なる場と見なす思想を身に付けたんじゃないだろうか。

相撲の地ベタと能の床が、周囲から区画されていることに注目してほしい。ユーラシア大陸各地に広がる相撲競技の中で場（土俵）を画するのは日本だけだし、能舞台の小さく限られた床が演技に対して与えるエイキョウはヨーロッパの演劇ではちよつと考えられないほど強い。日本の床を考える時、周囲から切り取られているという性格を忘れてはならない。

平らで清浄、周囲から切り取られている、この二つの日本の床の特徴を建築の歴史の上でさかのぼると、**B** 古代の神社にまで行きつく。伊勢神宮で知られるように、昔々の日本列島の住人は、聖なるもの、聖なる場を表現するにあたりユニークなやり方をした。

ギリシヤ正教やキリスト教や仏教などのほとんどの宗教は光り輝く神仏や神の子の像を作り、それを壮大な神殿や教会の中に納めているが、日本ではそうしたものを見せるような建築的演出はしない。代りに何をしたかという³と、神々のいます山の麓に神を寄り付かせるための柱を一本ま³ず立てた。いわゆる依代（よりしろ）である。しかしこれだけでは聖なるものの演出としては心もとないから、その周囲の草や木を取り除き、地ならしし、河原からきれいな石を選んで敷き詰め、**C** 中にケモノが入り込まぬよう柵を回した。⁴ギリシヤやキリスト教などのようにあたりに威を払う建物なんか必要としなかった。現在、伊勢神宮では依代の柱の上に高床式の本殿がかぶさるように立っているが、飛鳥時代、大陸から挿入された仏教建築の壮麗さに驚き、やむなく豪族の館を持つてきて建てて対抗したというのが本当のところだろう。

わが列島の御先祖様は、屋根と壁からなる神殿建築はなくとも、ただ一本の柱とその周囲に画された清浄な平面だけでじゅうぶん聖なるものを感じ取ることができたのである。そしてこの、清浄な平面に対する聖なる気持ち⁴が、床というものへの深い感受性につながってゆく。

私がこれまで訪れた全国各地の床の中で最も印象的だったのは、岡山藩の郷校（上層農民の学校）の閑谷齋（しずたにこう）で、その講堂（元禄十四年完成）の畳にすると数百畳敷の板の間は、三百年間の雑巾がけによつてにぶく光り、座っているだけで背筋の伸びてくるような精神性を感じ取ることができた。

最後になったが、日本独得の床として知られる畳敷について触れておこう。板敷のような精神性はないが、それでも犯すべからざる性格は持っている。それが証拠に、書院造りや数寄屋造りにおいては、天井や壁面（柱、壁、障子など）はいろんなデザインがあるが、こと畳の床はどれも変らない。**D** 私たちは、古建築を訪れた時、畳の面は意識せずに、その上に展開する壁や天井のデザインの妙を鑑賞する⁵。しかし意識しないからといって畳の価値が低いわけではなく、**E** 逆で、変化しない畳の面こそが座標軸になっており、床の間も柱も障子も天井もその不動の座標軸の上で安心して舞い踊っている⁶。明治以降今日まで、^dイクタの建築家が日本の伝統様式の近代化に取り組み、優れた成果をあげているが、申し合わせた

ように畳にだけは手を付けていない。

改めて口にしないが、それをやったらおしまい、という。アンモクの了解が日本の建築家全員にあるのである。床は

□。

(藤森照信『天下無双の建築学入門』による)

問一 傍線部 a、e の片仮名の語を、漢字に改めなさい。

問二 空欄 A、E にあてはまる語を、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を書きなさい。

(ただし、同じものを二度以上選んではならない)

- ① だから ② ついには ③ しかし ④ むしろ ⑤ さらに

問三 傍線部 1「まさぐり」、傍線部 3「心もとない」、傍線部 5「鑑賞する」の本文中での意味として最も適当なものを、それぞれ次の各群の①～

⑤のうちから一つずつ選んで、その番号を書きなさい。

1 まさぐり

- ① 指先などでもてあそぶ
② 指先などでゆっくり歩く
③ 指先などで優しく触れる
④ 指先などでしつかりつかむ
⑤ 指先などでさがしもとめる

3 心もとない

- ① 普通ではない
② 親しみがない
③ ものたりない
④ くつろげない
⑤ みつともない

5 鑑賞する

- ① 見て楽しむ
② 本質を見極める
③ 理解して味わう
④ 感心してほめる
⑤ 冷静に見つめる

問四 傍線部2「欧米人より日本人の方が足の認識力は高いことが証明できるだろうし」とあるが、そう考えられる理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号を書きなさい。

- ① 子どもの頃、水の引いた泥沼に腰までつかって、わずかな足先の触覚だけで貝と石ころ、フナとコイ、ウナギとナマズを識別できたから。
- ② 日本の伝統様式の近代化に取り組み優れた成果をあげている建築家でも、申し合わせたように畳にだけは手を付けていないから。
- ③ 日本人は板敷の床だけでなく、畳の床に対しても犯すべからざる神聖な意味を書院造りや数寄屋造りなどの伝統的な建築において与えてきたから。

- ④ 世界中で日本人だけが、床は平で清潔でなければならないという特別の考えを持ち、その考え方に基づいて家を作ってきたから。
- ⑤ 日本人は湿ったり乾いたり、温かかったり寒かったりと変化のいちじるしい列島の地べたを素足のスリ足で何千年も歩き続けてきたから。

問五 傍線部4「ギリシヤやキリスト教などのようにあたりに威を払う建物なんか必要としなかった」とあるが、この理由を述べている部分を、本文中から四十五字で抜き出さなさい。

問六 傍線部6「舞い踊っている」とあるが、これは何のどのようなことを述べたものか。次の①～⑤の説明の中から最も適当なものを一つ選んで、その番号を書きなさい。

- ① 床の間も柱も障子も天井もすべてのデザインが、躍動感あふれる様式で統一されていること。
- ② 床の間や柱や障子や天井などのデザインが、思う存分工夫の凝らされたものになっていること。
- ③ 床の間や柱や障子や天井などのデザインが、いずれも能舞台の芸術性とその源流があること。
- ④ 床の間や柱や障子や天井のデザインが、それぞれ個別の美しさを追求しようとしていること。
- ⑤ 床の間や柱や障子や天井のデザインが、時間とともに着実に洗練されたものになってきたこと。

問七 空欄「」に当てはまる語句を、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号を書きなさい。

- ① 日本人の心そのもの
- ② 神聖にして不可侵
- ③ 伝統の坩堝（るつぼ）
- ④ 未来に続く道
- ⑤ 日本人の感性の象徴

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

何を読むかということは、個人の精神の自由と同じほど全く自由の領域に属することだが、それはただ a バクゼンと、何を読んでもいい、という自由ではない。何でもいいから手あたり次第に読む、というのは放恣 (ほうし) ¹ であって、自由ではなからう。 b チツジヨのない乱読は乱雑な文化人を生み出すだけである。

もし読者が社会人で、いま初心にかえって古典を読もうとしているとしたら、学生時代の、特に高校時代、ひいては中学時代に、ほとんどはじめて眼にして、すこしでも記憶にのこっている名前の作品、とりわけ。カンメイを受けたおぼえのある作品を、あらためて読んでみようとするのが一番いい。教科書で部分的に読んだ作品である。まれにはほとんど全部読んだことがある、という作品でもいい。あらためて、全部、読んでみようとするのが大事だ。

私は何といつても『徒然草』を第一に ^d 才す。何だ『徒然草』か、とばかにしてはいけない。二十歳代での『徒然草』の読書、三十歳代での『徒然草』の読書、四十歳代での『徒然草』の読書と、読者の受けとめかたが、刻々かわってゆくのだ。

刻々かわってゆくといつても、読者の気分でぐらぐらと読みかたがかわる、という意味ではない。本当の読書は、作品にしっかりと結ばれた読みかたをする。作品は、^e 読者の意識の反映した世界ではない。作品は、たしかに読者が参加することによってはじめて成立するといわれているとおりだが、それは読者の意識の反映する世界として読め、ということではない。読者は一旦、作品にしばらく必要がある。作品を謙虚に受け入れるのがすぐれた読者である。だから読みかたがかわるということはあまりないはずだ。刻々とかわってゆくようにみえるのは、本当にかわったのではなくて、読みかたが深まっていったのにすぎない。以前には見えなかった『徒然草』の深い部分や、暗い部分が、読者の読みかたの成長によって、見えてくるのである。

これは読者の年齢が高いほど、読みが深い、ということをかかわらずも意味しない。ここが大事なことだが、いずれの年齢のばあいにしても、以前に読んだときより、今回のほうが読みが深くなる、ということだ。こうして、古典文学は、二度読む、あるいは二度以上読むことが大切だ、という重要な指針がみちびき出される。

古典はくりかえし読まれるものだ、とよく言われるのはその意味であった。

『徒然草』は、だれでも、まえに一度は読んだことがある。

A 今回、全部を読みとおしてみようかと決意するのは、本当をいえば再度挑戦し

ていることになるのだ。

書物は何千何万と存在してきたにしても、B、過去からくりかえし読まれてきた古典を、われわれもまた初心にかえってひもといてみるという⁴ことが、大切な第一歩なのだ、ということになる。

『徒然草』は、長い年月をかけて書かれ、四十代後半にまとめられた著述といわれている。著述というものには、幅広い読者層を想定したものや、老熟した書き手が若者をあいてに語りかけるものなど、さまざまな形態がありうるわけだが、『徒然草』の場合を考えてみると、著者一じしんの四十代後半という年齢は、大きい意味を持っている。

それは、仕事のうえでも、家族の長としても、円熟した、人格の完成期にさしかかる年齢である。実際に、仕事が不如意であるとか、家庭を持っていない、ということがあるとしても、それを高い見識によって、肯定することのできる年齢である、ということが出来る。C、仕事があまくゆかないのは、そうみえていだけで、本当は肯定するにあたいするものであることを知り、これから完成させようとする。仕事への渴望が大きければ大きいほど、不満もまた大きかったのにすぎない。また、家庭を持たない、ということは、高い見識であって、日本文学のなかに、大きな思想の潮流をなしている。西行の作品や、長明の『方丈記』や、そしてこの『徒然草』が読まれつづけたことには、深い理由があるのだ。

『徒然草』の読者に最もふさわしい年齢は、著者とだいたい同じ四十代後半ではなからうか。人生の円熟期にある読者にいちばんアピールするものを『徒然草』は、ナイゾウしている。

D、それ以外の年齢のものが読んでもだめだ、ということはない。あらゆる年齢にむけて、文学作品は開放されている。『徒然草』は、若者の古典入門書のようにして読まれているけれども、それは準備にすぎないので、読者は、成長しながら、三十歳代にはいつて一度、四十歳代にはいつてもう一度と、くりかえし読んでいい古典文学だ、ということをごここで言いたいの⁶にすぎない。

(藤井貞和『古典を読む本』による)

問一 傍線部 a ～ e の片仮名の語を、漢字に改めなさい。

問二 空欄 A ～ D にあてはまる語を、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を書きなさい。
(ただし、同じものを二度以上選んではならない)

- ① つまり ② むろん ③ 結局 ④ ところが ⑤ だから

問三 傍線部 1 「放恣(ほうし)」、傍線部 4 「ひもといてみる」の意味として最も適当なものを、それぞれ次の各群の①～⑤の中から一つずつ選んで、その番号を書きなさい。

- 1 放恣(ほうし) 4 ひもといてみる

- | | |
|--|---|
| ① 優柔不断で決断できないこと
② 個性的で目立ちすぎることに
③ わがままでしまりのないこと
④ 落ち着きがなく見苦しいこと
⑤ 自分というものがないこと | ① 独創的な解釈を試みる
② 本をひらいて読んでみる
③ 書店でさがしてみる
④ 細かく分析してみる
⑤ 心から受け入れてみる |
|--|---|

問四 傍線部 2 「何だ『徒然草』か、とばかにしてはいけない」とあるが、『徒然草』がばかにされる理由が書かれている部分を、本文中より二十字で抜き出さなさい。

問五 傍線部3「作品は、読者の意識の反映した世界ではない」とあるが、ここで筆者が戒めているのは、どのようなことか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選んで、その番号を書きなさい。

- ① 作品を読まないで、他人の感想を聞いて読んだ気になること。
- ② 作品の良し悪しを、選挙のように読者の人気投票で決めること。
- ③ 作品の解釈を、読者が自分の知見の範囲内で独りよがりに行うこと。
- ④ 作品の背景にあるものを、常に作者の私生活に結びつけて考えること。
- ⑤ 作品に対して自分自身の評価軸がなく、他人の評価に流されること。

問六 空欄「」にあてはまる語を、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

- ① 松尾芭蕉
- ② 兼好法師
- ③ 清少納言
- ④ 紫式部
- ⑤ 紀貫之

問七 傍線部5「仕事への渴望が大きければ大きいほど、不満もまた大きかったのにすぎない」とはどういうことか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選んで、その番号を書きなさい。

- ① 文学という仕事が意義のあるものかどうかを考えれば考えるほど、それが明確でないところに不満が大きくなったのだ、ということ。
- ② 仕事から得られる収入への欲望が強くなればなるほど、今の仕事の対価についての不満が大きくなったのだ、ということ。
- ③ 仕事において周りに求める要求が厳しくなればなるほど、それを求められたひとの不満が大きくなったのだ、ということ。
- ④ 仕事に対して達成しようという目標が高くなればなるほど、現状に対する不満が大きくなったのだ、ということ。
- ⑤ 仕事に習熟し、出世への関心が高まれば高まるほど、今の地位に対する不満が大きくなったのだ、ということ。

問八 傍線部6「あらゆる年齢にむけて、文学作品は開放されている」とはどういうことか。次の①～⑤の中から最も適当なものを一つ選んで、その番号を書きなさい。

- ① 文学作品は、どの年齢のひとが読んでも、一つの正しい作品解釈に導いてくれる。
- ② 文学作品は、世の中に流通するものなので、様々な年齢の人が読む可能性がある。
- ③ 文学作品は、どんな年齢で読んでも、人生や世の中に対する見識を深めてくれる。
- ④ 文学作品は、様々な年齢のひとに読まれるので、作品解釈は読者それぞれに任せられる。
- ⑤ 文学作品は、様々な年齢の読者を想定して書かれていて、誰が読んでも楽しめる。